

タイトル: 2023 年度 中東☆イスラーム教育セミナー (第 19 回)

日時: 2023 年 9 月 21 日 (木) -24 日 (日)

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室 (303)

『頑迷固陋なイスラーム君主アウラングゼーブ』という宿痾

小倉智史 (AA 研)

本報告では、ムガル帝国皇帝アウラングゼーブ (在位 1658–1707 年) の政策に関する過去半世紀の英語圏における主要な研究を紹介するとともに、それらの研究が提供した知見がアウラングゼーブに対する通俗的な理解をどれほど改めたかを論じた。

一般的に、アウラングゼーブは敬虔な信仰を持ったスンナ派ムスリムの君主であり、自らの篤い信仰ゆえに、その半世紀近くにわたる治世の中で、非ムスリムに対するジズヤの再賦課や、ヒन्दゥー寺院の破壊命令といった、異教徒を弾圧する政策を実行して、18 世紀以降のムガル帝国の長い衰退期を招いた人物と考えられている。このような見方は現代インドでも広く共有されており、ヒन्दゥー右派によるムスリムに対するヘイトを正当化する根拠となる象徴的人物と位置付けられている。しかし、早くも 1960 年代末から、アウラングゼーブに対するそのような見方は疑問視され始めていた。まず、サティッシュ・チャンドラが彼のジズヤ再賦課に関する評価を詳細に検討し、その実効性を疑問視するとともに、この政策はムガル帝国史の転換点になったとは到底言えないと結論付けた。ジズヤ再賦課という政策実行が、イスラームの信仰とダイレクトに結びついたものだったかどうかという点についても、チャンドラは否定的な評価を下している。また、アリーガル大学の研究者であったアトハル・アリーは、帝国の貴族層 (マンサブ保持者) の割合を詳細に検討し、アウラングゼーブ時代に非ムスリムのマンサブ保持者の割合はむしろ増えていたことを明らかにした。ヒन्दゥー寺院の破壊についても、リチャード・イートンはムスリム王朝時代における寺院破壊を包括的に検討した論文の中で、イスラームの偶像崇拝を否定する教義よりも、むしろ寺院と結びついた政治権力に対する打撃を企図することが、ムスリム王朝時代を通じた寺院破壊行為の要因であったことを論じ、アウラングゼーブによる寺院破壊命令も、その例に漏れないものとした。また、皇帝による寺院破壊命令が実行されたのはあくまでバラナシ周辺であり、帝国全土で実行されたわけではないことも、イートンによって明らかにされている。

21 世紀にはいると、文化史的な側面からもアウラングゼーブ時代の政策実行に対する再評価が進んだ。イギリス人研究者のキャサリン・バトラー・ブラウンは、アウラングゼーブが音楽の演奏を禁じたというニコラ・マヌッチの記録を詳細に検討し、それが皇帝周辺の私的空間における演奏の遠慮であり、帝国全体で音楽の演奏が禁じられたわけではないと結論付けた。このほか、アウラングゼーブ時代のヒन्दゥー教徒文人を取り上げたラージーブ・キンラや、皇位継承戦争で弟アウラングゼーブに敗北したダーラ

ー・シュコーが、実際にヒンドゥー教徒に対して「寛容な」皇子であったことを疑問視するスプリヤー・ガンディーの研究など、過去半世紀の豊富な研究の蓄積によって、一般的に知られているアウラングゼーブに対するイメージは、英語圏の学界においては現在ほぼ通用しないと言ってよい。

しかし、これら英語圏の研究による知見は、日本語で書かれた概説書にはほとんど反映されておらず、多くの場合で、いまだに古いナラティブに乗った記述が再生産されている。その背景には、ムガル帝国史を専門とする研究者の圧倒的な層の薄さがあり、一朝一夕で解決することは難しい。学術的な営みとして、アウラングゼーブを「正統スンナ派の」「頑迷固陋な」「不寛容な」君主として論じること自体は、別に構わない。しかし今後は、(1) 個人の信仰のレベルなのか政策実行のレベルなのか、(2) 政策を実行すると宣言しただけなのか、あるいは実現したのか、(3) 実現したとしたらどの程度の地理的、社会階層的範囲にわたって実現したのか、(4) 実現した政策の根拠は本当にイスラームに求められるのか、等といった要素の切り分けとパラメータの設定を明確にして、「正統な」「不寛容な」君主とはいったいどのような意味なのか、明確に定義づけを行う必要がある。その上で、本発表で紹介した先行研究への批判的言及が求められる。

(文責: 小倉智史)